

図書館だより

No.10

國學院大學
北海道短期大学部図書館
平成23年10月6日



○國學院大學北海道短期大学部は、**高校生以上**の地域の皆様に図書館を開放しています。

○開館時間
月—金 9:00—18:30
土 9:30—16:00
○休館日
日・祝日、他に大学指定の休日

○利用ご希望の方は、運転免許証など、ご自身を証明できるものをお持ちのうえ、カウンターで利用登録をしてください。

○詳細は、図書館にお尋ねください。
Tel.0125-23-4111

○ホームページ
<http://www.kokugakuin.jp/tosho/>

○滝川市立図書館が市庁舎2階に移転されます。今後は、本学の情報コーナーも設置されるなど、図書館同士の連携が深まっています。

目次：

「読書特集 名画を楽しむ」 寺山佳代子	P2
「読書特集 音楽の感動を力に」 松田由理子	P2
「読書特集 世界を知るために」 田中 一徳	P3
「読書特集 時々読み返したくなる本」 河野 のり子 ●図書館連絡帳	P4

「図書館だより」と、なんと平易なネーミングのまま、10号までできてしまいました。
本学図書・紀委員会では、学生や利用者のためのより良い図書館づくりをいつも考えています。学習・研究のための高度な資料収集、情報環境整備。対して読書の楽しみを応援する話題本の選定など。
今号では、その図書・紀要委員会から読書感想文ならぬ、おすすめ本(CDも)紹介をいたします。各委員と図書館職員がお贈りするメッセージを、どうぞお受け取りください。



本との出会い

— 私の三冊 —

図書・紀要委員長 **山寺 三知**

私は、本短大で中国語と漢文を教えますが、実は、主な研究テーマは中国音楽文化の歴史です。このようなテーマに行き着いたのには、考えてみれば、受験生・大学生時代に出会った本が大きく影響していたようです。ここでは、それらのうち主なものを三種紹介しましょう。



『民族音楽学理論』徳丸吉彦著 放送大学教育振興会 1996年

私は大学受験に失敗し、一年間浪人生活を余儀なくされましたが、その頃、進路について考えるためもあって、興味の赴くままに放送大学の講座を視聴していました。そのときに出会ったのがこの本です。高校まで音楽中心の生活を送っていた私は、この本によって、それまで持っていた音楽観が人類普遍のものではないことを知り、また、日本人、そして東洋人にとって音楽とは何かを考えるようになりました。

『アジア歴史研究入門(全五巻)』島田虔次ほか編 同朋舎 1983年

大学で中国文学を学ぶことにした私は、國學院大學文学部に入学し、そのまま國學院大學中國學會という研究会に入りました。そこでの様々な研究活動の中で、先生方から、研究に用いるテキストの質について厳しく指導して頂きました。そのような経験の中で、私は、どうしたらテキストの良し悪しがるわかるのだろうかかと疑問に思うようになりましたが、そのときに、出会ったのがこの本です。この本には、中国を含めたアジアの諸地域の歴史に関して、研究に用いる文献の解題はもちろんのこと、各地域・各時代に関する研究状況が詳しく説明され、今でも重宝しています。

なお、類書に、山根幸夫編『中国史研究入門』(1983年 山川出版社)・礪波護ほか編『中国歴史研究入門』(2005年 名古屋大学出版会)などがあります。

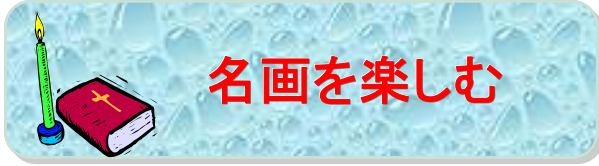
中国の歴史や文学に興味のある人は、あわせて参考にとるとよいでしょう。

『中国の音楽世界』孫玄齡著 岩波新書 1990年

大学で中国文学を学びながら、音楽学については独学していましたが、いつしか徐々にそれらが自然と融合し、中国音楽について興味を持つようになり、そこで、中国音楽勉強会という学外の団体が主催する中国音楽の講座に参加するようになりました。その講座の講師をなさっていた方がこの本の著者である孫玄齡先生です。本書は、歴史が長く、ジャンルも幅広い中国音楽について、わかりやすく、しかも要点を押さえて紹介しています。今、思えば、中国音楽の基礎知識はこの本から得ていたのだと思います。



読書特集



名画を楽しむ



寺山 佳代子

図書・紀要委員
(総合教養学科 教授)

『最後の晚餐』高久真一著

日本基督教団出版局1997年刊

「最後の晚餐」といえば、ミラノサンタ・マリア・デッレ・グラツィエ聖堂にあるレオナルド・ダ・ヴィンチ (1452-1519) の作品が、日本ではいつの時代にも親しまれている。この絵のテーマは永遠であるから制作者にとって尽きせぬ魅力があり、ダ・ヴィンチ以外の作品は日本ではあまり知られていないが、実際には膨大な数の「最後の晚餐」があると思われる。美術館で誰もが鑑賞できる作品はわずかで、多くは教会堂や修道院の中にある聖職者たちの食堂に「最後の晚餐」の絵が壁にかかっている。

名画の内に秘めたるドラマを読み解くためには、ヨーロッパ文化の根底にはキリスト教があることを知る必要がある。聖書は部厚いので読む気はしない学生が多いと思われるが、知識を得るために少なくとも新約聖書のマタイによる福音書26章20節から読んでみよう。そこにはイエスと12人の弟子が過越(すぎこし)の食事の席についている場面が述べられている。これが「最後の晚餐」となる。『そして、イエスは

一同が食事をしているとき言われた、「特にあなたがたに言うが、あなたがたのうちのひとりが、わたしを裏切ろうとしている」。弟子たちは非常に心配して、つぎつぎに「主よ、まさか、わたしではないでしょう」と言い出した。—中略—「しかし、人の子を裏切るその人は、わざわいである。その人は生まれなかった方が、彼のためによかったであろう」。イエスを裏切ったユダが答えて言った、「まさか、わたしではないでしょう」。「いや、あなただ」(『聖書』、日本聖書協会引用) この本の著者は「イエスの愛する弟子の一人が師を裏切るという、余りにも人間的なおぞましいエネルギーと、それを契機に人類の罪を贖い救おうとする、英雄的な神的エネルギーとが真っ向から対決する場面」と解説する。この絵を見ながらユダを探してみよう。新約聖書を読みながら、残り11人の弟子、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ、ペテロ、ヤコブ、アンデレ、ピリポ、トマス、バルトロマイ、シモンを、それぞれの表情、姿勢、所作に注目しながら探し出そう。この本で紹介されているダ・ヴィンチ、ドウッチョ、ラモン・デストレンツ、ビーテル・プールビュス、ティントレット、ヘールセンその他の14枚の「最後の晚餐」を鑑賞しよう。



◎図書館より



本学図書館には、この他に最後の晚餐の修復を描いた大型の画集『Leonardo 最後の晚餐』NewtonPress 2000年刊 があります。



音楽の感動を力に!



松田 由理子

図書・紀要委員
(幼児・児童教育学科 教授)

Merry Christmas from VIENNA

世界3大テノールの一人プラシード・ドミンゴが、毎年12月にゲスト歌手を迎えて開催しているコンサート・ライブで、ウィーンの冬の恒例の催しになっています。このCDの中からぜひ聞いていただきたいのは、ゲストのポップ

ス界のスーパーstar [マイケル・ボルトン] の演奏です。シューベルト「アヴェ・マリア」、「きよしこの夜」「ホワイトクリスマス」など魂から歌いあげる圧倒的な歌唱力で4000人の聴衆を興奮の渦に巻き込んでいます。クラシックの音楽を勉強している私ですが、ジャンルを超えて感動と衝撃を受け、音楽の素晴らしさを再確認いたしました。皆さんがいろいろなシーンで挫折・ストレスを感じた時に、彼の歌が何かを与えてくれるでしょう。



読書特集



世界を知るために

— 私の三冊 —

田中 一徳

図書・紀要委員
(幼児・児童教育学科 助教)

『文明化した人間の八つの大罪』

(コンラート・ローレンツ：新思索社)

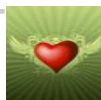
著者は、『攻撃一悪の自然誌』（みすず書房）や『ソロモンの指輪 動物行動学入門』（早川書房）においても有名なコンラート・ローレンツ（1903 - 1989）。1973年ノーベル生理学・医学賞を受賞したオーストリア生まれの動物行動学者である。本書は、文明化がもたらした現代社会の様々な課題について、「人口過剰」「人間どうしの競争」「遺伝的な頹廃」「教化されやすさ」「生活空間の荒廃」「感性の衰滅」「伝統の破壊」「核兵器」という八つの章立てにより我々に警鐘を鳴らしている。

本書の一貫したローレンツのメッセージは、文明化による人口増加や科学技術の進歩が必ずしも人類にとって、良い結果にはなっていないのではないかというものである。我々人類は、豊かさや幸福を求め技術改革や土地開発を行い、長い年月をかけて人口を増やしてきた。その代償として、現代社会では、人口過密と過疎、自然破壊、食糧不足、水不足、ゴミ問題、エネルギー不足など多くの課題を招く結果となった。

3・11東日本大震災における大津波や原子力発電所の被災により、多くの人々が、今までのライフスタイルについて振り返ることとなった。ローレンツが述べているように正のフィードバックから、負のフィードバックが必要な時代になったのかもしれない。約40年前に書かれた本書は、今なお新鮮である。

『21世紀事典』

(ジャック・アタリ：産業図書)



『21世紀事典』は、フランスの経済学者ジャック・アタリ（1943-）により1998年（日本語版1999年）に記された21世紀の預言書ともいえるべき語彙集である。著者は、故ミッテラン大統領の補佐官、初代ヨーロッパ復興開発銀行総裁としても名声が高い。

本書におけるキーワードは、「ノマド(nomad)」である。ノマドは、北アフリカや中央アジアにおいて、羊や牛を追って生活している遊牧民を意味するが、近年ではモバイル機器やインターネットを活用したオフィスをもたない会社や働

『社員をサーフィンに行かせよう
パタゴニア創業者の経営論』
(イヴォン・シュイナード：東洋経済新報社)

自然環境の保護および回復をするために少なくとも売上の1%を小さな環境保護団体に寄付するアウトドア・アパレルメーカーがある。南アメリカ大陸のアルゼンチンとチリの両国に跨る地域名をもとにした「パタゴニア(patagonia)」である。パタゴニア社は、ペットボトルをリサイクルしたフリースジャケットや防寒・防水性がある高機能シェル、機能的なカバンやリュック等を商品として提供しているが、元を辿ると1950年代後半にクライミング道具であるクロモリブテン鋼のピトンを作った

「シュイナード・イクイップメント社」が前身となる。



本書は、創業者のイヴォン・シュイナードが、パタゴニア社の歴史や精神、経営理念について書いたものである。タイトルにある「社員をサーフィンに行かせよう」は、「非公式」なルールで、本当に社員は、いつでもサーフィンに行っているようである。そこには、「①責任感」「②効率性」「③融通をきかせること」「④協調性」「⑤真剣なアスリートを多く雇う」というような狙いがあり、会社の「フレックスタイム」と「ジョブシェアリング」の考えを具現化したものであるという。この精神は、本書にあるように会社と社員の信頼関係があるからこそ成り立っているといえる。

パタゴニア社におけるビジネスで最も重要な使命は、売上高より、利益より「私たちの地球を守る」ことであると述べている。自然環境の絶え間ない変化の営みや生態系の順応と同様に、企業として多様性や変化を促し、百年後も存在し、社会に影響を与える会社を目指していることに注目したい。

く場所を自由に選択するワークスタイルを実践している人々の意味でも使われる。ジャック・アタリは、戦争や災害に追われて家を無くし、自らの意思とは無関係に移動せざるを得ない人々や海外の様々な都市に飛行機で移動しながら仕事をするハイパーノマド(超ノマド)、他にもハイパーノマドに憧れる人々についても記している。21世紀を前に記された、300を超える言葉の定義は、約10年を過ぎた今でも活きた意味として十分に光り輝いている。また、ジャック・アタリは、『21世紀事典』の続編として、サブプライム・ローン問題を予言したといわれる『21世紀の歴史—未来の人類から見た世界』（作品社：2008年）を発刊している。こちらもおススメの一冊である。

読書特集

「時々読み返したくなる本」

河野 のり子

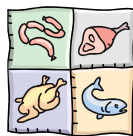
『富士日記(上)・(中)・(下)』

武田百合子著 中公文庫

作家・武田泰淳の妻である著者が、夫が創作活動のために富士山麓に建てた山小屋での生活を綴った日記です。昭和39年から13年間に渡りノート12冊に書かれたその日記は、夫・泰淳が著者より早くに亡くならなければ、おそらく世に出ることはなかっただろうと思われる私的な日記です。私はこの本を時々読み返しています。本棚から適当に引っ張り出して、上・中・下どの巻のどのページから読み始めてもおもしろく、ついつい時間を忘れてページを追ってしまいます。

他人の、山小屋での生活。それは大きな事件などもなく、毎日の食事や買い物の記録だったりするわけで、そんなものを読んで何が楽しいのだろうか、と自分でも不思議に思うのですが、そこに書かれている百合子さんの伸びやかで生き生きとした文章にはいつも深く感銘を受けるのです。しかもそれは読者を意識して技巧を凝らした文章ではありません。百合子さんがその時に見て、感じたことを素直に表現しているだけなのです。それがおもしろくて笑ったり、どきっとしたり、時にじーんと涙ぐんだりしながら読んでいます。

もう40年以上も前の日常なのに武田家の山小屋の食卓は意外にお洒落なのにも驚かされます。そしてなによりも、百合子さんの感性は現代の感覚でも少しも古びてはおらず、今もこれから先もずっと新鮮な香りを放ち続けていくのではないか、そう思える作品です。



『コルシア書店の仲間たち』

須賀敦子著 文春文庫

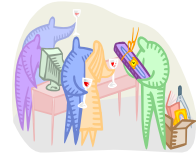
イタリア文学の翻訳家・随筆家である著者が大学卒業後に留学、10年ほどを過ごしたイタリア、ミラノのコルシア書店で出会った人々をめぐり、思い出のエッセイです。

コルシア書店はふつうの本屋とは少し違っていました。著者によると1930年代に起きたキリスト教の「聖と俗の垣根をとりはらおうとする『新しい神学』」の流れを受け継いでおり「司祭も信徒もなく、ひとつになって、有機的な共同体としての生き方を追求しようという」運動の拠点でした。著者もその書店で活動し、仲間たちと語り合い、彼らから多くを学び、その中から人生の伴侶を得ることになります。

翻訳家である著者は洗練された日本語の使い手でもあります。この本の中でも敬愛する個性的な仲間たちのことが美しい文章によって語られています。しかし、それは30年の年月が過ぎ去った後に、すでに存在しないコルシア書店と、亡くなってしまった最愛の夫、散り散りになった友人たちとの懐かしい記憶が綴られていく、切なくも哀しい物語でもあります。

それでもなお、孤独と静かに向き合って、すっと背筋を伸ばした文章には清々しさと愛おしさが溢れていて、たまにふらっとその世界に入っていくくなる作品です。

(図書館職員)



知っていますか? 図書館連絡帳



◆館内での飲み物について

図書館閲覧席での飲み物については、キャップのできる「ペットボトル」「マイボトル」に限り持ち込み許可になりました。

これは、あくまで**試行的な措置**であり、飲んだ後のペットボトル放置、資料の汚損など好ましくない事態が起きた場合は、取止めになりますのでご注意ください。

◆図書館で無線LAN

図書館内で、無線LANが使えます。利用者のノートパソコンも持ち込み可です。充電されていない場合は、**専用コンセント(本学学生のみ利用可)**をお使いください。

◆HPから、貸出情報

本学図書館OPAC(蔵書目録)のTOP画面から、**利用者自身の貸出情報**を見ることができます。学生の皆さんには、自動で**IDとパスワード**が付与されていますので、図書館カウンターでお尋ねください。同様に文献複写依頼機能もご利用ください。

